

ずいひつ No.114

2015年11月25日発行

げんそう うつつ はざま

幻想と現の狭間で

秋の名残を追い出すかのように冬の気配を強く感じるこの頃。首元から忍び込む風の冷たさに、背筋を震わせることが多くなってきました。夏にはどこか浮ついた空気を感じていたはずの夕暮れは、僅かに、けれど確実に質量を増して、楽しかった時間が終わってしまう時のような、物悲しさをつれて来ます。

下がっていく気温に連れ徐々に視界は薄暗くなり、人の輪郭が曖昧になっていく逢魔が時、さっきまで聞こえていた周りの声はいつしか聞こえなくなって、足元で木枯らしに舞う枯葉の音が妙に耳についた時、気づいたらその場にいるのはたった一人、自分だけ……。

そんな時に微かに感じる、取り残されたような不安。あるわけが無いと思いながらも何か特別なことが起こったのかも……と、子どもの頃の記憶を探すような遠い意識のどこかで、何かを期待している自分。冷たくなった手指をギュッと握りしめて、ふと目に入った木の根元にあるのは、人間の——なんてことが実際に起こったことは、これまでの人生で一度も無いのだけれど、そんな【あるわけがないのに、でももしかしたら…】という気分にとっぴり浸かれる小説で、現実とそうでないものの狭間に漂ってみませんか？

私にとって恩田陸の作品は、如何ともし難い、自分の中での位置付けに困るものでした。ミステリという視点に立てば謎が解明されなさ過ぎる、ホラーという視点に立つと不穏さは感じるものの、恐怖を感じるまではいかない。でも、今回のテーマに挙げた通り「幻想と現の狭間」に落ちていける作品の名手として、彼女の名前をまず挙げたいと思います。個人的には白黒ハッキリした物語が好きなのですが、それでも恩田陸の新刊が出るとチェックしてしまうし、未読の本が図書館にあることを知ると、うずうずと読みたくなる。そう、恩田作品はどんなジャンルであれ、読んでいる時は寝る間も惜しんで没頭して



しまうほどおもしろいのです。なんと言っても状況描写が秀逸。小さく小さく折りたたまれた薄紙を丁寧にゆっくりと、奥行きを感じられるほど大きく広げていくようにして展開される世界。その土地が醸し出す雰囲気、主人公が感じている息苦しいほどに張りつめた空気、登場人物たちの声。紡がれた世界であるはずの事柄が、まるで自分の日常と地続きに存在しているような気になって、気がつくとき取り込まれているのです。寝ている時にみた夢を説明するような、普段漠然とした印象でしか捉えていないモノを、ありありと思い浮かべて感じることができる、そんな抗い難い魅力が恩田陸の文章にはあって、読み進めるうちに自分の立ち位置も、確立していたはずの常識（時にそれは思い込みに過ぎないのだけれど）も、ふう〜わりと揺るがされていきます。「この場所」と「ここではない場所」、「今」と「今ではない時間」、「在りえる事」と「在りえない事」、そして「現実」と「夢」。揺らいたまま真逆にあるものの境界を超えてしまいそうな、その実、境界にある溝に落ちているような不安な錯覚が、思いのほか心地よく、後を引くのです。

ホラー映画を観ると、夜お風呂で髪を洗っている時「後ろに何かいたらどうしよう」とか「鏡に自分ではない誰かが映っていたらどうしよう」と思うことありませんか？ でも、ホラー映画のように目に見えて分かる異質なんて大した事では無いのです。本当に怖いのは、気づかないうちに日常ではない何かに取り込まれてしまっている事。本を読んで、空気が薄くなったような息苦しさや説明できない焦燥に、わざと身を任せてみませんか？ それまで見ていた現実が、いつも通りに見えるかどうかの保証はできませんが……。